



目次

●「医師会病院 院長 退任にあたって」.....	2
●「医師会病院 院長 就任のご挨拶」.....	4
●お知らせ「DPC 対象病院への移行について」.....	5
●「新入職員紹介」.....	7

院長挨拶

医師会病院院長退任にあたって



鹿児島市医師会病院

前院長 山口 淳 正

会員の皆様へ

私こと山口は鹿児島市医師会病院へ昭和59年6月に赴任して以来、約24年間お世話になりました。

顧みますと、小生と鹿児島市医師会との関わりは、昭和47年9月より鹿児島市医師会成人病センターの依頼で、十二指腸内視鏡を使った膵胆管造影を始めたのが、そもそもの始まりでした。当時は週に4ないし5日は午後から、上部消化管内視鏡検査の際には朝からセンターで仕事をし、夕方大学へ帰りデータの集積などの業務を行っておりました。文部教官になる昭和54年までは殆ど医師会の検査業務に従事していたような気がします。そうこうする内に昭和54年頃から医師会病院建設の話があり、医師会病院を作るにあたり久留先生などからの内視鏡室設計の相談を受けていました。当時大学の内視鏡グループのチーフであった洪江先生方と設計の一部を担った覚えがあります。当時の大学では内視鏡室とレントゲン透視室が離れており ERCP（内視鏡的逆行性膵胆管造影）をするのにワゴンで道具を運んでいって仕事をする、道具が足りないと内視鏡室まで走っていくという不便さがありましたので、内視鏡室

と透視室は隣接するようにアドバイスいたしました。さらに昭和58年には鹿児島市医師会より消化器担当医師の派遣要請がありました。小生は当時第二内科の医局長の任にありましたので、教授と医師会からの派遣要請に対し如何に應えるかを協議しておりましたところ、小生に医師会に常勤医師として出張するようにとのご下命を受け、当院へ出向することになりました。当初は美園君と2人でした。2人で検査、入院、外来を担当しておりましたが、徐々に増加する患者さんに対応しきれず第二内科に応援を頼み、60年度から常勤医2人医員3人体制となりました。61年から常勤医2人医員4人と6人体制がしばらく続きました。平成元年になり、初めて研究医が入局し、平成18年までは第二内科はもとより第一内科、第三内科、検査学その他の診療科から内視鏡の勉強に来てくれて、沢山の若者と一緒に勉強させていただきました。一時期は最大10人に及ぶ研究医の皆さんと一緒に仕事したことがありました。今では一緒に勉強した仲間の多くは一国一城の主となり、または病院に勤務しながら消化器部門の重責を担っているようです。私の蒔いた一粒の種がこれほど大きな木になり広い日陰を作り、多くの人々

の命を守っておられるかと思うと感慨もひとしおです。これら若い先生方と一緒に勉強することにより小生も大いに学問的刺激を受けました。お蔭様で時代の流れに取り残されることなく消化器内科の分野を歩いて来れました。これも偏に当院で内視鏡技術を会得すべく勉強に来られた若い皆さん方のお陰と感謝しております。小生も一医師としてこの医療機関で医療に従事させてもらい、県下あるいは遠くは宮崎県、熊本県の市民の方々の少しでもお役に立ったのかなと思っております。又、内視鏡医療を提供するには環境が大事です。この働きやすい環境を作ってくれたコメディカルの皆さんがおられなければ、到底この仕事は成し遂げることは出来ませんでした。歴代の内視鏡技師の皆さん、看護師の皆さんに厚くお礼申し上げます。

さて、平成17年に院長という重責を担う事となり、初めに手を付けた仕事の基本理念、基本方針の策定でした。そしてIT化の促進、病院機能評価の受審でした。それにはハード・ソフトの両面に多大な経費を要しました。殊に院内における職員の皆さんの患者さんへのホスピタリティの心を醸成することに傾注しました。すなわち、これからの医療は患者さんに対する従来のパートナーリズムで接する時代ではない事を周知してもらうことでした。人と人との円滑な関係性を築くためには先ず挨拶から、そこで挨拶運動を展開しました。挨拶運動の嚆を掛けて病院玄関に立ち受診される患者さん方への挨拶を始め、院内を巡視しました。お蔭様で朝夕の職員同士の挨拶の声をよく耳にします。さらに院内で行われる全ての事に関し、各種委員会より上がってきた事を経営会議において検討し担当理事会にて決議していただくことにしました。これで初代院長の佐藤先生が言われた風通しのよい病院になったと自負して

おります。上意下達でない分、物事の決定に時間を要するのは否めませんが4年間という短い歳月でわたしの思っていた事の数分の一は達成できたものと思っております。また、この期間低医療費政策という国の方針の中で病院運営を強いられた経営上は苦しいものがありました。そのような環境の中で一緒に頑張ってくれた職員一人一人の協力に心よりお礼申し上げたい。これでやっと市内の中大型病院とハード・ソフトの面で肩を並べることが出来ました。これからは市民の皆さんに医師会病院は、良い意味で何かしら他の病院とは少し違うと言われるように努力してもらいたいと思います。

小生は今後も少しでも市民の皆さんのお役に立てればと思い、若い皆さんに迷惑にならないよう、当院で囑託として消化器の仕事が続けたいと思っております。今後とも宜しく願います。

医師会病院院長就任のご挨拶



鹿児島市医師会病院

院長 田 畑 峯 雄

今年4月1日から山口淳正先生の後任として鹿児島市医師会病院の4代目院長に就任した田畑です。わたくしは昭和59年（1984年）の開設と同時に2代目院長の迫田晃郎先生に随って外科医員として赴任し25年間外科医として勤務させてもらっています。会員の先生方からは当初から多くの患者を紹介していただきありがとうございます。開放型共同利用の都市型医師会病院として設立されたのは最近の医療連携の傾向を先取りした大英断だったと思います。開院当時から医療を取り巻く環境は厳しいと言われながら最近まで病院運営は順調に経過してきました。

平成18年度の過去最大の診療報酬マイナス改定、朝令暮改の加算外し、受診抑制などで、当院も他の医療機関同様に18年度から赤字基調となりました。赤字の原因は厚生労働省の低医療費政策に加えて新館増設による原価償却費の増加、ICTシステム構築による支出、クリティカルパスの普及に伴う在院日数の短縮による病床稼働率の低下などが挙げられます。

このように医療崩壊が進む中、鹿島友義医師会長より院長就任のご下命を受けまして重責を担うことになりました。

赤字対策として7：1看護加算、SPD、DPC、急性期リハビリなど取り組んできましたが出遅

れはいがめません。遅ればせながら4月1日からDPC対象病院に決まりましたが、入院化学療法と術前検査の外来移行で病床稼働率のさらなる低下も懸念されます。患者が増えない限りは厚生労働省の思惑通りに病床数削減を迫られる可能性もあります。

紹介型の当院の患者集客は困難で、会員の先生方からさらに多くの患者を紹介していただくかありません。診療科ごとに現場の診療部長と看護師長が会員施設を訪問し、情報交換、忌憚の無いご意見・要望を伺うのはいかがかと考えています。医師会行事や専門部会の研究会・勉強会にも積極的に参加し会員の先生方との交流を深めてまいりたいと思います。

経営の観点からは将来的に梯子が外されることを見越した上で乗るべき医療制度にはきちんと乗って収益を上げる必要もあると思います。地域医療計画の中で連携パスが4疾患の連携ツールとして位置づけられました。近い将来保険収載も予想されますので後手に回らないように取り掛かりたいと思います。

赤字基調は当分続くことが予想されます。医師会病院の存続と発展のため鋭意努力する覚悟があります。会員の先生方からさらなるご支援、ご指導をお願い申し上げます。

お知らせ

DPC 対象病院への移行について

平成21年 4月 1日から

入院医療費 の算出が DPC 方式 に変わりました

当院は、厚生労働省が指定する「診断群分類別包括評価制度（DPC）」の対象病院となり、平成21年 4月 1日以降に入院された患者様においては、入院医療費の算定方法が、従前の「出来高算定」から「包括算定」へと変更になっております。

1. DPC による入院費の算定方法

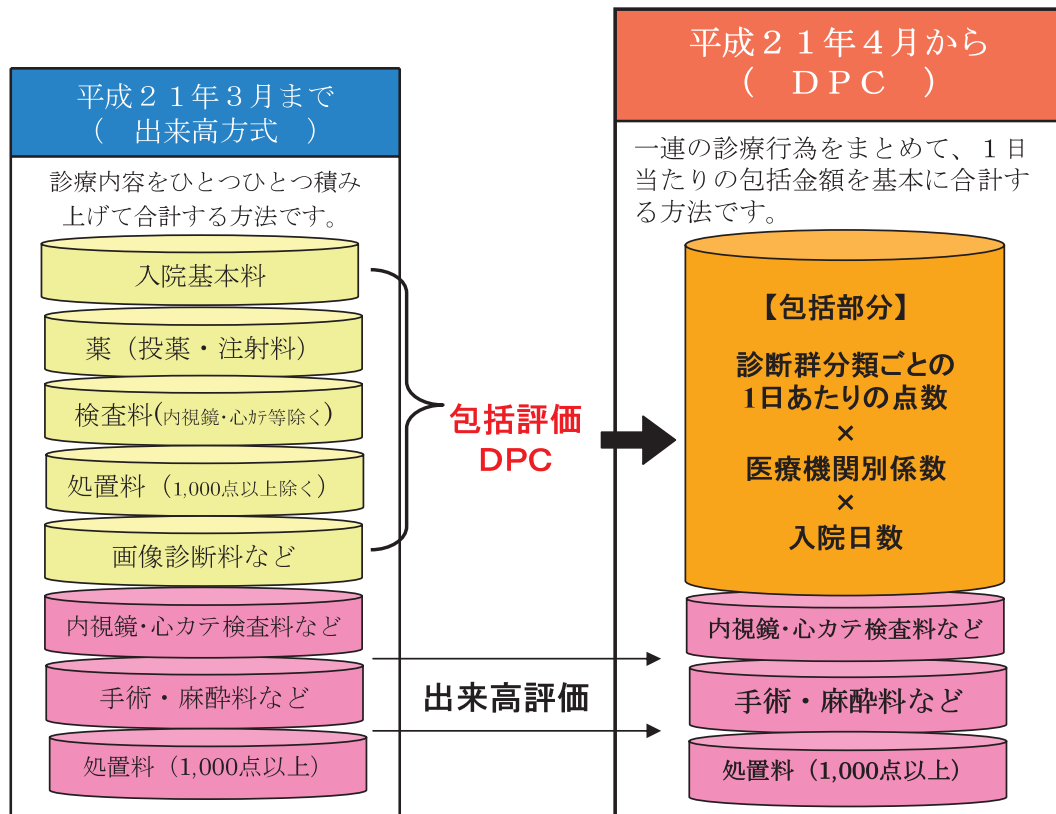
DPC では、1572種類の診断群分類ごとに1日あたりの定額の点数（包括点数）が定められています。入院医療費の計算を行うには、まず病名、手術・処置の有無、副傷病名などによって診断群分類を決定し、その診断群分類に定められた包括点数を基本に1日あたりの医療費を算定します。

また、この方式により算定される包括部分は、入院基本料や検査、投薬、注射、画像診断等であり、一部の検査・処置、手術、麻酔等については、従来と同様に「出来高払い方式」で算定されます。

2. 包括部分の計算式

包括部分の費用 = 診断群分類毎の1日の包括評価点数 × 入院日数 × 医療機関別係数 × 10円

（※医療機関別係数とは、病院の機能に応じて病院ごとに定められる係数です。）



DPC の導入により、今後ますます諸施設・先生方との連携強化が必要となります。

ご紹介いただいた患者様に、最良の医療を提供するため、急性期医療を担う当院の DPC 導入へのご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、ご不明な点等ございましたら、DPC 担当までお問合せください。

新入職員（新任医師）紹介

外科医師

<プロフィール>

(H 21. 1. 1 ~)

名 前 中 蘭 俊 博

出 身 県 鹿 児 島 県

出 身 大 学 鹿 児 島 大 学
(平成14年卒)

前 勤 務 先 鹿 児 島 大 学 病 院

趣 味 温 泉



ご迷惑をおかけすることがあるかもしれませんが、
よろしくお願いいたします。

小児科医師

<プロフィール>

(H 21. 1. 15 ~)

名 前 石 川 珠 代

出 身 県 鹿 児 島 県

出 身 大 学 鹿 児 島 大 学
(平成18年卒)

前 勤 務 先 鹿 児 島 大 学 病 院

趣 味 映 画 鑑 賞



小児科医として、しっかりとした診療ができるよう励
んでいこうと思います。よろしくお願いいたします。

【 基本理念 】

患者様の意思と権利を尊重し、会員や地域の医療ニーズに応え、
安全で質の高い誠実な医療を提供します。

【 基本方針 】

- 1) 医療を通じて地域社会への貢献
- 2) 救急医療の推進
- 3) 専門性を追求した高度医療の実践と連携の強化
- 4) 予防医学と医療人教育

鹿児島市医師会病院 連携室だより No.12

創刊日：平成17年8月10日

発行日：平成21年4月10日（年3回 4・8・12月発行）

発行者：〒890-0064 鹿児島市鴨池新町7番1号

鹿児島市医師会病院 院長 田畑 峯雄

担 当：医療支援部 医療連携室

T E L：099-254-1125（代表）

T E L：099-254-1121（連携室直通）

F A X：099-254-1308（連携室直通）

ホームページ：http://city.kagoshima.med.or.jp/kasiihp

ご意見などございましたら、お気軽にご連絡ください。